

紀元7世紀におけるイギリスの宗教事情：特にベネディクト修道士の活動について

竹内, 直良 / TAKENOUCHI, Naoyoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

1956-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010657>

紀元七世紀におけるイギリスの宗教事情

特にベネディクト修道士の活動について

竹 内 直 良

序

中世初期（六—八世紀）ブリタニアとアイルランドの宗教界において、東方ヨーロッパ大陸と密接な関係を持つ著名な伝道家にアウグスティヌス、コルンバヌス、ボニファシウスの三人がいる。この中コルンバヌスを除く他の二人はローマ教皇と常に交渉をもち、教皇を戴く中世カソリック教会の組織化統制化に貢献をした点において特に重要である。アウグスティヌスは教皇の命を受けてイギリスの布教に従事し、ボニファシウスは教皇の援助を得てドイツの伝道を行っている。而も両者共にベネディクト修道院で教育をうけた人物である。前者はローマのベネディクト修道院に育成されて五九七年イギリスに宣教し、後者はそのイギリスのベネディクト修道院から出て七一六年ドイツの教化につとめた点において、二人の精神的な連関乃至は事業の類似性を認めることが出来ると思う。

かくの如く二人を結ぶものがベネディクト修道院であるとするならば、この二人の中間期即ち七世紀のイギリスにおけるキリスト教会、特にベネディクト修道院はどのような活動をしていたか、そうしてそれが中世キリスト教史の上になどのような意味を持つかという問題について聊か検討して見たい。

周知の如く、七世紀のイギリスはゲルマン族の一派アングル人、サクソン人、ユート人の移住後で統一政権はなく、所謂 *Heptarchy* と称せられる蛮族諸王の割拠時代であり、同地におけるローマ文化の衰亡と共にこれら移住民の持つ

異教が横行する時代であつた。

けれどもこれに先立つ二世紀即ち彼等の侵入前、アイルランド、スコットランドを中心としてキリスト教は目覚ましい活動を行つてゐたことは、当時の歴史を繙く者の等しく認めるところである。既に五世紀にスコットランド生れで decurio (ローマ十人兵長) の父を持つパトリック (Patrick, d. 461) がガリアにおける Tours の St. Martin 修道院や、南地中海の小島 Lerins 修道院、更に Auxerre の修道院などで修行後、ローマに至り教皇ケレスティヌスの命をうけて、アイルランド各地に布教し、東北隅 Saul (Down Patrick 附近) Armagh などに修道院を建ててゐる。次いで五—六世紀にはブレンダン (Brendan, d. 578) の Clonfert 修道院、コムガル (Congall, d. 601) の Bangor 修道院 (Down 地方)、フィニアン (Finian, d. c. 552) の Clonard 修道院が現れ、これよりフィニアンの弟子所謂 Twelve Apostles of Erin の活動期に入り、以後 Clonmacnoise, Durrow, Lismore, Armagh などの諸修道院はアイルランドにおける学芸の中心地として隆盛に赴いた。一方スコットランド方面では、上記のパトリックと殆んど時を同うして、ニニアン (Ninian) がツールの聖マルチンの弟子となつて修道後、帰国して Whithorn の小島に修道院 (Candida casa 即ち白色の家) を建て、更に先の Twelve Apostles of Erin の一人コルンバ (Columba, Columcille) が五六三年西岸の小島 Hi (後世誤称して Iona という) に修道生活を行い、之を基地としてブリタニア北部の伝道を開始している。次にイングランド地方も一衣帯水のガリア地方から伝道者が渡来し、四世紀頃には次第に地歩を固めたようである。三—四年のアルルの宗教会議に三名の司教 (ヨークの司教エボリウス、ロンドン司教レスティトゥツス、任地不明の司教アデルフィウス) がブリタニアから出席してゐる事実、或は三六〇年のアリミナム (Ariminum, Rimini) の宗教会議にも同じく三名の司教が列席してゐる事実などは、その証左であらう。次いで五世紀に入ると四二九年オークセルの司教ゲルマヌス、トルアの司教ルプスがペラギウスの異端を剝服するために渡英し、サクソン人、ピクト人の来寇に際してブリトン人を率い闘の声ハレルヤを連呼して遂にこれを撃退したという話も、同地域の信者数が当時僅少ではなかつたことを示すものであらう。然るに以上のうち、アイルランド及びスコットランドの所謂 Celtic Monasteries はその後も比較的順調な発展をつゞけ得たのであるが、これに反しイングランド地方のキリスト教は五世紀中葉以降アングル人、サクソン人、ユート人の侵入によつて殆んど絶滅し、唯ウェールズ地方に Bangor (Flintshire の ⁽⁴⁾), St. Asaph⁽⁵⁾ などの

修道院が僅に過去の繁栄を留めているに過ぎなかつた。

かゝる背景を持つブリタニアに新しく登場したのがアウグスティヌスである。けれどもアウグスティヌスの渡来当時ブリタニアの南部にキリスト教信者が絶無であつたと極言することは出来ないものであつて、既に改宗した王室を持つ隣国フランクからキリスト教は徐々に伝来していたと想像される。例へばケント王 Aethelbert がフランクの Charibert の娘 Bertha と結婚したため、彼女に伴つて Iudhard 司教が渡英し、以後カンタベリーの東に聖マルチン教会が設けられるようになった。(6) 事実がある。とは云え、当時一般庶民の道德生活はキリスト教精神とは程遠く至つて野蠻であつたことは、後、アウグスティヌスとグレゴリウス教皇との間に交換された書簡の中にも反映しており、特に一部の間では己れの継母と結婚することさえも平然と行われていたようである。(7) とまれ、かゝる情況のうちに細々ながらも保持されたキリスト教は、Celtic Christianity の場合の如くガリアから伝来したものであり。云わばローマ直系のキリスト教ではなかつた。

然るにこの形勢は五九七年アウグスティヌスが同志四十名と共にケント王国の東方 Thanet (當時は島) に上陸してから一変した。広く世間に伝えられた興味深い物語「後の教皇グレゴリウスが、ローマの市場で見た奴隸少年がアングル人 (Angli) であると聞いた時、それと発音の類似する天使 (Angeli) を連想して同族に好意を持ち布教を思い立つた (8)」という事の真偽は別としても、我々の注意すべきはアウグスティヌス及びこれに従う一行は以前の様なガリアから渡来した伝道者たちと異り、すべてローマ教会から直接の命令をうけて派遣された人々であり、且いづれもベネディクトの戒律の下に修行した修道士であつたといふことである。グレゴリウスは先に五七四—五七八年間修道士となり、ローマのカエリス山に聖アンドレ修道院を建てベネディクトの戒律に遵つて修行していたが、教皇に就任後 (五九〇)、己れの弟子で同院の修道士であつたアウグスティヌス等を異教徒のブリタニアに送り、困難なるこの改宗事業を敢行せしめたのであつて、ブリタニアはこゝに初めてベネディクト修道士を仲介としてローマと直接交渉に入ることゝなつたわけである。けれどもアウグスティヌスはカンタベリーに移住後は以前のような修道生活に没頭することなく、司教として布教に乗り出し、同志 Mellitus を East Saxons の司教たらしめ (在ロンドン)、又 Iunus をケント司教 (在ロチェスター) たらしめた。この二人はグレゴリウスが第二回派遣隊としてイギリスに送つた。(9) 人で、同じくアンドレ修道

院で暮した修道士と推定される。もとよりこの地に純然たる修道院が設けられなかつたのではなく、カンタベリーの東壁外に「聖ペテロ及び聖ポーロの修道院」が設立されているが、その修道院長 Laurentius はアウグスティヌスの死後第二代のカンタベリーの大司教となり（六〇四）、ラウレンティウスの死後上記メリトゥスが第三代の大司教となつてゐる。（六一九）

以上の経過を見ればイギリスにおける新しい宗教活動は、ローマにおいてベネディクトの戒律による修道生活を体験した人々を以つて主力としているが、彼等は大陸に見られるような隔離的隱遁的な生活を行つていない。修道院は大陸の場合のように俗化した教会に対立するものではなく、教会活動の原動力である。勿論彼等自身は修道的戒律に拘束される。グレゴリウスがアウグスティヌスに与えた書簡にも

されど貴下（兄弟なる）は修道院の戒律によつて教育されたれば、イギリス人の教会において貴下の聖職者たちより特に離れて居る（暮す）ことは許されず。——*Sed quia tua fraternitas monasterii regulis erudita, seorsum fieri (al. vivere) non debet a clericis suis, in Ecclesia Anglorum, ...—Beda, H. E. (Migne, Patrologia Latina, 95) I, 27, p. 58.*

と述べつゝも布教に當つては禁欲独身を強制することなく

聖職者を除き、聖職にもあるものにして、もし禁欲し得ざるものあらば妻帯すべし。——*Si qui vero sunt clerici extra sacros ordines constituti, qui se continere non possunt, sortiri uxores debent, ...—Ibid. I, 27, p. 58.*と云い、又アウグスティヌスが妊娠中の婦人に対して洗礼を行つてよいかという質問に答えて

授胎は全能なる神の前には何等責むべきものに非ざるに、妊娠せる女とは云へ何故に洗礼さるべきに非ずとするや。——*Mulier etenim praegnans cur non debeat baptizari, cum non sit ante omnipotentis Dei oculos culpa aliqua fecunditas carnis? —Ibid. I, 27, p. 62.*

として無用の顧慮を戒め、又メリトゥスに与へた書簡には

即ち、この民族間にある偶像の神殿は決して破壊さるべきに非ず。されどその神殿にある偶像そのものは破壊さるべし。——*videlicet quia fana idolorum destrui in eadem gente minime debeant; sed ipsa quae in*

eis sunt idola destruantur;Ibid, I, 30. p. 70.

となし、更に

かたくななる心より、一時にすべてを取り去り得ざることは疑ひなし。何となれば、最高の地位に登らんとつとむる者は、一足跳びすることなく、徐々に又は一歩づつ上るが故に。 — Nam duris mentibus simul omnia

abscidere impossibile esse non dubium est, quia et is qui summum locum ascendere nititur, gradibus vel passibus non autem saltibus elevatur. — Ibid, I, 30. p. 71.

と至つて着実な而も温和な方法で伝道を奨励したのであつた。これを要するに、このケントに布教されたキリスト教は修道士たちによつて開始されたけれども、それは決して大陸のような禁欲的修道思想の鼓吹ではなく、ローマ教皇の方針に従いつつ社会生活を営む庶民を徐々に改宗して行くことを最大の目的としたものであつた。

アウグスティヌスの渡来後三十年を経ずしてキリスト教はノーサンブリアに進出してゐる。これは同国王 Edwin がケント王 エセルバートの娘でキリスト信者なる Aethelberg と結婚し、Paulinus が彼女に付き伴うて北に旅したためである。このパウリヌスはさきのメリトゥスやユストゥスと共に第二次派遣隊の一人としてローマの聖アンドレ修道院から来た人物であるが、彼がノーサンブリアに來つて伝道につとめた結果、王エドウィンは長き逡巡の後、六二七年の復活祭にヨークで彼から洗礼をうけて信仰に入つた。更にこのパウリヌスの努力によつて Lindsey 地方から多数の新しい信者が現れ、こゝに北方キリスト教發展の種子が植えられたのである。尤もこのエドウィンは六三三年に Heathfield (Hatfield Chase) の戦ひマーシア (Mercia) 王 Penda 及びブリットン王 Cadwalla の同盟軍に殺され国土荒廢するに及んで同国のキリスト教は一時頓挫したが、エドウィンの孫 Oswald がカドワラを Denisesburn (St. Oswald's Cocklaw) に破り(六三四)、名実共にノーサンブリアを統一するに至つて形勢は又もや一変した。オスワルドは嘗つて Hii 島に暮した熱心な信者であつたから、同島の修道士 Aidan を迎えて Lirdisfare に置かしめ、又諸地に教会や修道院を建立し、自然これよりスコットランドの修道士がノーサンブリアに移住するようになった。かくてヨークを中心とするローマ的キリスト教(但しパウリヌスは Heatfield の戦後ケントに避難し、助祭 James (Jacob) が留る)とリンディスファーンを中心とするケルト的キリスト教との二系統が生ずることゝなつた。— アイダンは六五一年に死

し、同じく Hii の修道士 Finan が来つてその職を襲う。――

次に East Anglia を見るに、王 Sigeberht はやぎに父王 Redwald の在位時代に追放されてガリアに來り、こゝで洗礼をうけて信者になつたが、帰国して即位後(六三一) Felix 及び Furseus (Furseus, Fursa) を招聘している。フェリックスは Beda によればブルグンド人の地方の出身⁽⁵⁾ (de Burgundorum partibus) とのみ記されその前歴は明瞭ではないが、Honorius なる人物の命をうけて Sigeberht の許に來り Dunwich (Dennoc ceaster) の司教となつた。ホノリウスはユストゥス(前はロチェスター司教)の後をうけてカンタベリーの第五代の大司教となつた人物であるから、フェリックスは当然ローマ的制度を身につけていたと考えられる。然るに一方ファーシーはアイルランド出身の修道士で王より土地を与えられて Cnobheresburg (Borough Castle) に修道院を建てた。⁽¹¹⁾――但し彼は後年バリーに近きラニーの修道院に移住。――従つてこの East Anglia にもローマ的ケルト的両修道院の分野があるのである。

次に West Saxons 即ちウェセックスにおいては、Birinus なる人、教皇 Honorius の命をうけ、ジェノアの司教 Asterius に敍任されてイギリスに渡つた時、ウェセックス王 Cynegilis は民衆と共に彼より洗礼をうけ(六三五)⁽¹²⁾更にノーサンブリア王オスワルドと協同してビリヌスを Dorcic (Dorchester) の司教たらしめた。次いで Cynegilis の子 Coiwalch が即位した後、フランス人で長くアイルランドに暮し聖書を研究していた Agilbert が渡來したが、言葉が通ぜず王に疎まれ、彼に代つてフランスで敍任されたサクソン人 Wini が來り Winchester の司教となつた。然るにこのウィニは職を追われてマーシアに逃避し、以後同国は長期間に亙り(六六三―六七〇)無司教となつたが、アギルバートの甥 Eleutherius (Leutherius, Hlethere) がカンタベリーの大司教 Theodore に敍任されてウィンチェスターに來り布教に尽力した。従つてこの国のキリスト教はローマ的なものに落いてはいるが、かなり不安定のように見える。

最後に East Saxons 即ちエセックスに移れば、前記のようにメリトゥスがロンドン司教となり聖ポーロ教会に住んだが(六〇四)王 Saeberht (ケント王エセルバートの甥)の三子メリトゥスをロンドンから追放し、同国は以後無信仰の状態がづいた⁽¹³⁾。その後同世紀の半、王 Sigeberht はノーサンブリア王 Oswy の勧めに従つて、Hii 島の出身でリ

ンディスファーンの司教であつた Finan から臣下と共に洗礼をうけ、⁽¹⁴⁾ 次いで同じくこのフィナンに任命された Cedd がエセックスの司教に任ぜられることゝなつた。この Cedd とは如何なる人物かというに、先にマーシア王ペンダが息 Paeda を Middle Angles 王に任命している。このペダがノーサンブリア王オスウィの娘 Ethelga を娶らんとためにフィナン司教から洗礼をうけ四名の司祭を伴つて帰国したその四名中の一人である。但し彼には固定の司教座はなく、常に旅行し定住しなかつたようである。とにかく右の事実によつてエセックスのキリスト教にはケルト的な色彩が濃厚であることが感ぜられる。

二

以上述べ來つたことを総括すれば、七世紀中葉のイギリスにおける主要諸国のキリスト教は、ケントはローマ教皇の直系として完全なるローマ的（司教座はカンタベリー、ロチェスター）、ノーサンブリアはヨークの司教座を中心とするローマ的に対してリンディスファーン司教座のケルト的なものがあり、East Angles ではローマ的なダンウィッチの司教座に対して Borough Castle のケルト的修道院があり、ウェセックスは不安定な径路を辿りつゝもローマ的なものに落着いたが、エセックスは初めローマ的なロンドンの司教座があつたが後ケルト的なキリスト教と變つてゐる。尤もこゝで云うキリスト信者とは王を含む国民の一小部分に過ぎず、未だ異教的偶像崇拜者が多数存在していた⁽¹⁵⁾と思われる。又王室にあつても前記二三の実例に見らるゝ如く信仰の動機が精神的なものでなく、外国の王女と結婚するための方に過ぎなかつた場合もあつたと考えると、彼等の信仰は決して深いものではなかつたであらう。尙一方完全にキリスト教を信ぜず異教徒の国として止つていたものもあつた。マーシア及び South Saxons 即ちサセックスの両国がこれで、前者はキリスト教を信ぜずノーサンブリアに屢々侵犯した猛族であり、後者は六八〇年代 Wilfrid の伝道する時までキリスト教を知らず、当時 Bosham に居たアイルランドの修道士に対して国民は何等の興味も感じなかつたようである。⁽¹⁶⁾

ところで我々が今注意したいのは右の改宗諸国に流れ込んでゐるローマ的、ケルト的という二つのキリスト教の系統である。この両者は特に根本的に対立し又は反目してゐたというわけではなく、新参のローマ的布教者は先輩のアイルランド修道士に一応の敬意を払い、新地の伝道事業には相提携して當つていたのであつて Bede の如きもその著、「教

会史」の中の随所にアイルランド修道士に並々ならぬ尊敬の意を示している。けれどもその半面、両者には深刻な相異点があり、それが相互の精神的融和を阻害する原因となり、延いては今後のイギリスにおけるキリスト教の發展に重大な支障を来す憂いがあつた。これを總体的に見れば、ケルト的キリスト教も元来は大陸から伝来したものであるが、當時はローマ教皇の権力は未だ微弱であつて、その命令の如きは何等の重要でなく、アイルランド、スコットランドの信者たちは自由にエジプトに巡礼して東方的修道生活に魅力を持ち、直接これを模倣しようとする傾向が強かつた。更に Irish 即ち Gaels には山岳海浜などで鍛鍊した頑強な身体を持つものが多く、その禁欲は極めて熱心嚴重であつて、Celtic Christianity は何時しか Celtic Monasticism と同義に解せられるようになった。然るにその後異教徒アングル人、サクソン人、ユート人などのブリタニア侵入があり、大陸との交通が杜絶するに至つて彼等は彼等なりに自己の生活に適應した特殊なキリスト教を發達させたのであつた。(17)

ところがその後、大陸にあつては西方教会は徐々に教皇の下に統制されて行き、修道院運動においてもベネディクトの戒律の如き温和な而も綿密な内容を持つものが普及し、その他聖職者の守るべき典札の問題、司教敍任法、特に復活祭の日取りなども古制を墨守するケルト流とは次第に相違するようになった。そうしてそれらの中、復活祭の日取り決定が最大の問題として採り上げられたのである。周知の如く、復活祭は現今でもキリスト教諸祝日中毎年月日を変更する唯一のものであり、今これに關する複雑な数学的理由を説明するには特に専門の智識を必要とするが、之を要するにケルト流と雖も元はローマ式復活祭を採用したものであつて、少くとも五世期中頃までは何等の衝突は見られなかつた。然るに四五七年曆法の改正に伴い、大陸では以前の日取りを変更したものが実施され初めた。ところがアイルランドではかゝる新制度を知らず、父祖伝来の日取りを襲用する。従つて現実的には両者夫々異つた祝日を持ち、外部から見れば一年に二回復活祭が行われたかの如き奇現象を呈するに至つた。これが最も目立つたのはノーサンブリアで、王オスウィはスコットランドで教育された為に旧式、その子 Alfrid (Aldfrith) はウィルフリドの薫陶をうけて新式という有様であつた。ケルト側としては長年守りつづけた伝統を棄て去るに忍びぬという理由があり、反対側としてはアイルランド人はキリスト教の統一を妨げ、教皇の權威を無視するとする。こうして両者の対立が表面化した時、オスウィの召集命令によつてホイットビーの會議が開催されることゝなつた。(18) (六六四)

Whitby は旧名 Streaneshalch、この地には当時学識人格において令名あつた修道女 Hilda の主宰する修道院があり、会場はこゝに定められた。この際ケルト派の主なるものは、リンディスファーン司教 Colman、エセックス司教セッド、ノーサンブリア王オスウィ、当ホィットビー修道院長ヒルダなど、之に対するローマ派はウエセックス司教⁽¹⁹⁾アギルバート、オスウィの子アルフリド及び新に登場したウィルフリドであつたが、闊論に当り、コルマンがコロンバヌス以来の諸先輩が遵奉した制度の正当性を主張したのに対し、ウィルフリドは終始攻勢に出で、聖ペテロの權威がコロンバヌスのそれに優る理由を熱弁を以つて説き、そのペテロの葬らるゝローマにおいて、更にイタリア、ガリアは勿論、この極西の頑迷なるピクト人、ブリトン人の住する地を除く外、全キリスト教会において実施せられおる新制の正しき所以を力説し、最後にオスウィ王の決定を経てローマ派の勝利に歸した。⁽²⁰⁾

然らばこのウィルフリド (Wilfrid, 709) は如何なる人物であらうか。彼はノーサンブリアの産、少年時代オスウィの宮廷にあつて王后 Eanfleda の寵をうけたが間もなくリンディスファーン修道院に移つて修行した。然し同院におけるケルト的な諸慣習に対して彼は共鳴し得ず、三年後こゝを去つてカンタベリーに至り、次いで Benedict Biscop と同道してローマに旅し、教皇の助祭 (archdeacon) なる Bonifacius の弟子となり、次いでリヨンに滞在後帰国した。その間彼はローマ的諸制度及びベネディクトの戒律を習得したが、その学識才能は当時著明であつたと思われ、アギルバートの推薦によつて上記の如くホィットビーの会議に活躍した次第である。六十七年ウィルフリドはアルフリドの命をうけて Ripon に修道院を建設し、Gilling の修道院長 Tunberht 及び博學を以つて知られた Coelfrid を招聘したが、このケルフリド (後の Wearnouth, Jarrow の修道院長) は同院の司祭として努むると共に、ケントに旅行して修道生活の實際を修得しウィルフリド補佐の任を全うしている。⁽²¹⁾ ケントは上記の如くローマ的制度の中心地、而も同地の修道院はアウグスティヌス直系のものが絶対多数であつたと思われるが、ウィルフリドのリポンの修道院においても間もなくベネディクトの戒律が採用されることゝなつた。⁽²²⁾

かくの如く、Celtic Christianity の牙城であるノーサンブリアが遂にローマ的キリスト教の制度を採用する結果となつたわけであるが、この為コルマン司教は辞任して郷里スコットランドに歸り、Tuda がこれに代つた。チューダは勿論正式の復活祭、脳天の剃髪を行つたが、之を要するに、かゝる大転向を可能ならしめたのはベネディクト修士ウ

イルフリドその人であつたことに注意されねばならぬと思う。

尤も我々は、これを機会としてケルト的修道士がブリタニアから一掃されたとか、ケルト的な禁欲主義が跡を絶つたとかと簡単に想像することは出来ぬであらう。けれども今後、少くともイングラントにおいては、キリスト教は二派が同等の勢力を以つて並立することは許されず、次第にローマ的制度を採り入れ、又修道生活にはベネディクトの戒律を基準とする方向へ進みつゝあつたと考えられる。例へば当時の宗教界の著名人 Cuthbert (d. 687) の生涯などを見てもこれが明かに現れている。カスバートが初めて宗教心を懷いたのは六五一年にリンディスファーンの司教 Aidan の幻影を見た時であるが、暫時兵士として活動後、Eata を院長とする Melrose の修道院に入つた。ところがリボンの修道院が創設されることになり、エアタを含む数名の修道士がこゝに移住した時カスバートもこれに加わる一人であつたが彼等はメルローズ時代の戒律を用い諸制度すべて旧式を襲用したのでアルフリド王は之を喜ばず、彼等を元のメルローズに返し、代つて前記ウィルフリドが来院して建設を完成し初代の院長となつた次第である。この経歴によつてカスバートはケルト的制度の中に育まれた人物であることが明かである。然るにホイットビーの会議後ケルト式が一般の支持を失うようになるとエアタ、カスバートは直ちに新制を採用し、更にカスバートはエアタの命をうけてリンディスファーンにおいて根氣よく新制度を教育したのであつた。(23)

かゝる旧制から新制へという時代の動きを利用してイギリスのキリスト教に巧み統一政策を実施したのが大司教 Theodore (在職六六八—六九〇)であつた。Beda の記載するところを要約すれば、(H. E., W. 1)「第六代のカンタベリ司教 Deusdedit 死し、ケント王 Egbert、ノーサンブリア王オスウィの二人が Wighard なる司祭をローマに派して后一任を求めた。教皇 Vitalian はカンパニアのナポリに程遠からぬ Niritian monastery (in monasterio Hiridano, al. Niritano) にいる Hadrian を推す。ハドリアンは自らその任に非ざるを告げ近く的女子修道院長 Andrew を推薦する。然るにアンドリュは病弱で不可能となつたためハドリアンは改めてローマの修道士テオドルを推挙した。テオドルは『ギリキアのタルススの産、ギリシア語及びラテン語にて世俗的學問並びに神學の教育をうけた品性高潔の士—natus Tharso Ciliciae, vir et saeculari et divina literatura, et Graece instructus et Latine, probus moribus...』で当年六十六才であつた。教皇はハドリアンがテオドルと同道して渡英することを条件として之を認め

た。それはハドリアンが旅行に経験があること、又テオドルが今後主宰すべき教会において『ギリシア人の習慣により——more Graecorum——』真の信仰に反せぬよう助言せしめるためである。」とある。こゝに云うギリシア人の習慣とは東方修道院（或は *Pasilian monastery*）の慣習を意味するものであろうか、孰れにせよ彼がベネディクト修道院の出身でなかつたことは確かのように思われる。然し又その故にケルト的制度に対し偏見を懷くことなく冷静着実に宗教問題を処理し得たと考えられる。

テオドルには非凡な政治的才能があり、且、教皇の命をうけて赴任した自己の重責を感じていたので、就任後、従来とかく分立の傾向あるイギリスの司教管区を整理しつゝ徐々にこれをカンタベリー大司教の下に服属せしめ、かゝる統制化のうちにローマ的諸制度の励行普及をはかつた。即ち六七三年 *Hereford* に宗教会議を開き、*East Anglia* 司教 *Bisi*, ノーサンブリア司教（ウィルフリド）の代理、ケントの司教 *Putta*, ウェセックス司教 *Eleutherius*, マーシア司教 *Winfrid* を召集して正規復活祭の遵奉、司教相互の不干涉、司教の修道院干渉嚴禁、毎年八月一日に *Clovesho* (24) にて宗教会議を開くことなどを決定した。次いで六八〇年テオドルは *Hatfield* に宗教会議を開いて諸司教と会合し（この事實は *Beda, H. E., W, 17* に記されてあるが司教名はない）、過去大陸において開かれた諸宗教会議の決議を確認して今後も *Catholicism* を堅持することを誓った。当時東方教会にあつては *Eutyches* の一性論が抬頭し、とかく多事であつたに拘らず、当イギリス教会ではかゝる紛乱に患わされることなく統一の実が挙げたのは如上のテオドルの手腕の結果であつたことは云うまでもない。

こうして七世紀におけるイギリスのキリスト教は *Celtic Christianity* の持つ地盤に大なる変動を与えることなく、而も巧にその慣習をローマ的なものに置換せしめつゝ全教会を統一している。テオドルの時代にはマーシアも *South Saxons* 即ちサセックスも共に信仰に入つたから今や遂に全イングランドの教会が同一歩調を取るようになり、云わばこゝに *National Church* が成立することとなつた次第である。イギリスの政治的統一は八二八年ウェセックスによつて成就されるが宗教的統一は既に一世紀半前の七世紀後半期に完成しているのであつて、かゝる大事業を敢行し得た所以はテオドルの優れた政治力によるとは云え、過去約七、八十年間アウグスティヌスの渡来以後、大陸の（ローマの）制度を体して活躍したベネディクト修道士の功績を見逃すことは出来ないと思うのである。

けれども以上の経過から推して直ちに当時イギリスにおけるベネディクト修道会（所謂O・S・B）の活動が積極的であつたと考えることは出来ない。ベネディクトの戒律そのものとイギリス教会の統一とは何等の関連を持つていないし、又この戒律に従つて生活する者と雖もO・S・Bの一員としての明確な自覚があつたわけではない。もとよりローマ的、大陸的な諸制度が年を追うて輸入されるにつれてこの島における修道院生活にも大陸において既に広布しつゝあるベネディクトの戒律が最も適切なものと見做されるに至つたであらう。かのアウグスティヌス渡来以後間もなくカンタベリーに設立された「聖ペテロ及び聖ボローの修道院」はベネディクト修道院であり、その院長ハドリアン^{Hadrian}の弟子Aldhelmが西方 Malmesbury 修道院（六七五年院長となる）にこの生活法を伝え、又ベネディクト・ビスコップがウィーマス及びジャローに建てた修道院にもベネディクト戒律が行われ、更に上記の如くウィルフリドの如きも同戒律の普及をつとめるといつたように、当時の宗教界の大立物は、殆んどすべてベネディクトの戒律と何らかの關係を持つてゐる。唯当時（八世紀）の代表的教会史家（Bedeの如き）は修道院創立者の人格、神秘的行為、遺骸の持つ奇蹟などに眼を奪われて修道生活の実状、様式、規律などには全く興味なく、同戒律を採用した過程の如きは記載していないから、この問題について詳細を知り得ぬのは遺憾であるが、これら主要人物がベネディクトの戒律を知つていた以上、彼等の修道院には当然これが実施されたであらうし、又事実においてこの時代に新院を設ける際、極端にまで禁欲的なケルト的（例えばコルンバの）戒律よりも温和にして行き届いた内容を持つベネディクトの戒律の方が、少くもイングリランドにおいては好ましかつたろうと思われる。とは云えこれらベネディクト修道院と称せられるものは、かの中世中期に強固な団結力を持ち、一般社会に対しては勿論のこと、教会に対しても特殊な權威を以つて臨んだ所謂O・S・Bの修道院とはかなり趣を異にしている。当時の彼等はベネディクトの戒律を採用しながらも、これを絶対的なものとしてこれに背かざるよう常に己れを律していた程ではなかつたと思われる。例へばかのウィーマス、ジャローの修道院は史上ベネディクト修道院として著名であり、又その院長ベネディクト・ビスコップはベネディクト戒律の奨励者として知られているが、事実においては彼は過去十七の修道院を歴訪の結果、その経験に基き自ら編纂した戒律を弟子に履行せしめ、唯重大事例えば院長選出などに際してはベネディクトの戒律を用いたに止つたようである（26）。従つて当時のベネディクト修道院と称せられるものも、その精神と日常の訓練において后世のそれとはかなりの距りがあつたと考え

てもよいであろう。然しこのことは却つて又当時のイギリス宗教界における教会と修道院との特殊な關係を示している。教会と修道院とは常に交渉があり、修道士が聖職者に転出して行く例は大陸において屢々見られる現象であるが、而も両者は各々明瞭に異つた分野にあり、異つた任務を持つている。この相異はその出発点における夫々の意欲の相異に原因するのであるが、イギリスにあつては両者の境界線はさほど鮮明ではない。これは当初においてアウグスティヌスその人が嘗つては世俗的なローマ人から隔離された修道生活をしていたに拘らず、渡英後は布教を第一の目標にかゝげ、戒律による禁欲的な生活を強制するよりも、むしろつとめて多くの信者を獲得することに力を注いだためと思われる。そうしてアウグスティヌスの配下にあつて専ら聖職を奉じ司教に任ぜられた者と雖も、單に修道的な共同生活にのみ没頭することなく、自らは一般信者とは異つた修道的な自制を行いつつも⁽²⁶⁾、信徒との密接な連絡を忘れなかつたのであつて、これは未だ Parochial system が大陸の如く発達しないために管区内司祭が行うべき宗教事務でさへも司教が行わねばならなかつたこと⁽²⁷⁾にも原因すると思われるが、要するにイギリスでは修道院が教会と対立の形をとることが殆んどなかつたようである。尤もこの時代、修道院はイギリス各地に続々と建設され、特に女子の主宰する男女共同修道院、所謂 Double monastery が多数あつたことは大陸と比較し得る顕著な特色であるが、但し当時イギリスにおいて monasterium と称せられるものは必しも monachus を以つて構成する特殊な集団を意味するのではなく、これが次第に Parish church として民衆と關係を持つ方向に進んで行く場合もあつた。かの nymster, minister なる語が元は monastery と同意義であつたのに、遂に cathedral の意味を持つようになったこの地の歴史を見れば両者の關係は自ら推察されると思う。かくの如くイギリスの修道院が反社会的隔離的な性格を持たず、教会と不可分の關係にあつたことは、当時のベネディクト修道士をしてケルト的教会とカトリック的教会との統一という極めて困難なる事業をさほどの波瀾を起すことなく遂行し得た重要な原因ではなかつたかと思われる。

三

以上の事実と併行して七世紀のイギリスには學問研究の著しい進展が認められるが、これにもベネディクト修道院は密接な關係を持つている。

当時のイギリスの学問には二つの系統があつた。一はアイルランドの学者たちの研究がイギリスに紹介されアングロ・サクソン人に吸収されて行く徑路で、他はアウグスティヌス以後大陸の文化が続々と輸入されて行く徑路である。然しこの両者間に特に対立や論争があつたわけではなく、前者が次第に後者に席を譲り遂には統一したイギリスの文芸として新しい展開を示すのであつて、この大陸系文化が積極的活動を開始するのは七世紀の中葉と考えられる。それはこの頃までアングロ・サクソン諸王国は政治的な対立抗争をくりかえしていたが、その中最も勇猛であつたのは異教徒マールシア王ペンダで、*West Saxons, Middle Angles* を従へ、特に熱心なキリスト信仰を持つノールンブリアに屢々侵入して脅威を与え、聖者と称せられるノールンブリア王オスワルドは六四二年にペンダの侵寇をうけ *Maserfield* で戦死している。ところがこのペンダが六五四年(又は六五五)ノールンブリア王オスウィ(オスワルドの弟)と戦つて陣歿した後、上記の如く信仰に入つていたその子ペダは *Dunm* を第一代の司教に任命し(司教座は以後三代を経て *Chad* の時 *Lichfield* に確定)、更に *Medeshamstead* 即ち *Peterborough* に修道院を起し、*Saxulf* をその院長に任じた。マールシアのこの改宗は全イギリスを一応平和に向わしむる効果を持ち、こゝに学芸發達の途が開かれることゝなつたわけである。

アウグスティヌスの渡来以後、カンタベリーにどの程度の学問研究が行われたかは全く知り得ないが、その学風が、*East Anglia* に伝つたことについては *Beda* の記述によつて知ることが出来る。同国では六三一年ごろ *Sigebert* が王位についたが、王はさきに即位前フランスにいた時既にその地で洗礼をうけた熱心な信者であつたので、アイルランドの聖僧 *Furse* のために上記の如く *Gnolheresburg* に修道院を建て、又晩年退位後、自ら *Bedrichsworth* (後の *Bury St. Edmunds*) 修道院に入つて剃髪し修道士としての修行を怠らなかつた。同王は *Beda* によれば、「彼は少年たちが学問を教はるために学校を設立し、ケントから招聘せる *Felix* 司教より援助をうけ、又彼(フェリックス)はケント人の慣習による教育者たち学者たちを彼等に与へたり (*Sigbert*……*instituit scholam in qua pueri literis erudirentur: iuvante se episcopo Felice quem de Cantia acceperat, eisque pedagogos ac magistros juxta morem Cantuariorum praebeante*.) *H. E.*, III, 18, p. 144」といふ。この学校は恐らく司教座のあつた *Dunwich* に設置されたと思われるが、要するにこの頃から大陸風の学問がケントを源として次第に広範圍に広まらんとしつゝあつた

ことが想像されるのである。

その後前記の如くマーシアの改宗があり、次いでテオドルがカンタベリーの大司教となり(六六八)、ハドリアンが之を輔佐した頃、大司教の威令は全イギリスに及び、同時にカンタベリーの学芸は未だ曾つてなき隆盛期を現出するのである。Bedaは云う、「而して二人(テオドルとハドリアン)は神学にも世俗の諸学にも共に深き教養を身につけて居たれば、群なす弟子たちを集め、有益なる知識の川は彼等の心を潤すために日々流れ出たり。更に又彼等は聖なる文書と共に、作詩法、天文学、教会数学などの教育を彼等の聴講者(弟子たち)に伝へたり。彼等の弟子のうちに、ラテン語とギリシア語とを母国語と同様に知るもの今日に至るまで生存し居るはその証左なり。(Et quia literis sacris simul et saecularibus, ..., abundanter ambo erant instructi, congregata discipulorum caterva, scientiae salutaris quotidie flumina irrigandis eorum cordibus emanabant: ita ut etiam metricae artis, astronomiae (al, astronomicae) et Arithmeticae Ecclesiasticae disciplinam inter sacrorum apicum volumina suis auditoribus contraderent. Indicio est quod usque hodie supersunt de eorum discipulis, qui Latinam Graecamque linguam aequè ut propriam in qua nati sunt, norunt.) H. E., IV, 2, p. 174.]」

このような盛況は恐らくカンタベリー以外の地においても見うけられたと想像される。例えばAldhelm(d. 709)は初めアイルランドの修道士Maldulfの設立した修道院(即ちMalmesburyの)の学校で教育を受けたが、次いでカンタベリーに來りハドリアン(聖ベテロ及び聖ポーロの修道院長)の下で研學した後、再び己れの出身地マームズベリーに歸り、Frome及びBradford-on-Avonに支院を起すと共に、このマームズベリー修道院の学校経営に最善の努力を払っている。(六七〇年代の初同院長となる)彼は当代最高の學識として知られていたから、この学校にも多数の青少年が集り來りその薫陶を受けたことと考えられる。一方北英においてはBenedict Biscop(d. 690)の活躍が認められる。彼は元ノースンブリア王室の臣であるが、ローマに第二回目の遊學後南仏Lerins(Lerinum)で修行し、ここで剃髪をかけて正規の修道士となつた(六六五ごろ)。このレランスの修道院は六六一年頃Aigulfがベネディクトの戒律を採用しているから(28)彼は当然ベネディクト修道士となつたわけであるが、その後、かのカンタベリー大司教に補せられたテオドル及びハドリアンに従つて歸英し、直ちにカンタベリーの聖ベテロ及び聖ポーロ修道院長となり二年間過し(そ

の後任がハドリアン、又もやローマに旅し南仏 Vienné にも立寄り多数の宗教書を或は購入し或は寄贈されて歸つた。六七四年郷里ノーサンブリアに戻り王 Egfrid (Egfrith) から Wear 河口即ち Wearmouth に土地を得て、未だイギリスにはなかつた石工、硝子工をガリアから招き壯大な聖ペテロ修道院を建立し、次いでローマに至り書籍、使徒殉教者の遺品、聖母使徒の聖像などを多数持参した上、教皇 Agatho から同院が外部より永久に侵寇されざる特権を受け、且ローマ的教会礼拝法を習得せんため聖ペテロ教会の archchanter なる John を伴い帰国した²⁹⁾。六八四年³⁰⁾ (又は六八五) 彼は王 Egfrid から更に新地を賜り Jarrow の修道院を起したが、同院は先のウィーマスウィーマスの修道院を離るゝこと僅か二里、両院合して一修道院と見做され院長も両院を監督する規定であつた。彼は生涯五回に亘りローマに巡礼したが、その間常にローマ文化、ガリアの学芸の輸入に努め、又ウィーマス、ジャロー両院のために図書館を設け、他方ベネディクトの戒律の遵奉を説いている。(但し必しも同戒律のみに準つた生活ではなかつたことは前記の通り)。六九〇年彼が中風で死し Coelrid が両院を主宰した頃、修道士の総数は六百名に達し、図書館は増築されて二倍の大きさとなり、蔵書中には Pandects (后世 Codex Amiatinus として知られ現存するラテン聖書の古写本) もあつた³¹⁾という。

かのビード (ベダ) が浩瀚なイギリス教会史を著述し得たのはこの図書館の蔵書のためであつたことは云うまでもないが、ビードは生涯殆んど旅行せずこの修道院で日を過しているから、彼の著作に窺われるその参考書を推定し、これを通じて当図書館の蔵書を察することが出来る筈である。この方法で調査した Thompson によれば、古代ラテン語聖書、Vulgate ラテン語聖書の写本、Gregorius 教皇の著書、ヒエロニムスの著書、諸教父伝、教皇書簡集、宗教會議法令集などの外に、自然科学方面ではプリニウス、イシドールの著作、その他文学方面ではヴィルギリウスは勿論、ホラティウス、オヴィディウスの詩集なども保管されていたという。⁽³²⁾

かゝる修道院における図書蒐集の傾向は、当然写本術の広範囲に亘る発達を誘致せしめ、それが遂にかの華麗にして精巧を極めた Lindisfarne gospels (七世紀末作) を産んだわけであるが、之を要するに当代におけるイギリスの学術は、ローマを中心とする大陸的文化がベネディクト修道士の努力によつて大量に輸入せられ、既存のアイルランド系学芸の基礎の上に展開したものと見る事が出来るのである。

以上述べて来た如く、六世紀末にイギリスに輸入されたローマ的キリスト教は、七世紀に至つて既存のケルト的キリスト教を己れの勢力圏内に抱合しつゝ、異常な進展を示し、政治的には未だ分裂割拠の *Heptarchy* の時代でありながら、宗教的には全イギリスが *カンタベリー* の大司教を中心として統一を完成したことが認められる。そうしてこの目覚しい成功は主としてローマから渡来したベネディクト修道士によつて行われ、又同時に彼等を通じてこゝに学芸の隆盛ことが知られるのである。この新しい動きは八世紀に入つて更に向上發展しつゝ九世紀へと進むべき筈でありながら、不幸八世紀末から始り九世紀後半期（特に八六七—八七〇間）において絶頂に達したデーン人の侵入のために、各地の修道院は全く壊滅し、過去二世紀に亘つて粒々辛苦した彼等の宗教的文化的諸活動は尽く水泡に帰してしまつた。故にイギリスの修道院運動は八世紀末に切斷され、ベネディクト修道院の再興は十世紀後半期 *Dunstan* の時代まで待たねばならないのであるが、さらばと云つてこの七世紀における彼等の努力は、決して無意味に終つたわけではなかつたのである。

我々は一般キリスト教史において、八世紀前半期にイギリスから大陸に進出した一群の偉大な伝道者の名を発見する。*Willibrod*, *Willibald*, *Winebald* 及び *Bonifatius* など、所謂 *Celtic mission* に対して *English mission* と称せられる人々であるが、このうち *Willibrod* (c. 658—738) はノーサンブリア人でウィルフリドの弟子としてリボンの修道院で学び、ベネディクトの戒律によつて修行した人物、フランクのピピン（チャールス・マルテルの父）の請を納れて *Frisia* に伝道し（六九〇頃）、教皇 *Sergius* から *Pallium* を受けユトレヒトの司教となつた。（六九二。大司教六九六）又 *Bonifatius* (*Winfrid*, c. 675—754) はウェセックスの人、ウインチェスター附近の *Nhutselle* (*Nursling*) のベネディクト修道院で暮し、ローマに至りグレゴリウス二世に謁し（七一八）、後、上記ウィリブルトの下でフリジアに布教をなし、次いでフランクの宮宰チャールス・マルテルの支援を得て *Thüringia* に入り *Amöneburg* 修道院を作り、こゝを伝道の根拠地とし、その後も常に法王庁と連絡し、チャールスの子 *Carloman* の助力を受けて *Concilium Germanicum primum* (七四二) を開催してベネディクトの戒律の普及実施を期した。彼は七五四年フリジアの *Dokkum* で殉教死しているが、ドイツ伝道の功績は著しく、特に弟子 *Sturmis* の創建した *Fulda* の修道院は中世文化史上重要

な役割を占めている。更にこのボンファシウスを助けてドイツ布教に尽力したウエセックス出身の Willibald (d. 781 又は 787) 及び Winebald (d. 761) の兄弟も共にベネディクト修道士であつた。正しくグレゴリウス一世の命によつて伝えられたイギリスのキリスト教が約一世紀後に大陸ドイツに逆輸入されたわけであるが、それはこの百年間イギリスにおけるベネディクト修道士の絶ゆる間なき活動とその余力が齎らせるものであり、デーン人のために消滅し去つたかの如く見える彼等の業績は大陸に移植されて新しい展開を試みつゝあつたことを示している。

次に文化方面においても類似的の径路が見られる。かのノーサンブリアにおける Wearmouth, Jarrow 両修道院の学問研究態度が目覚しいものであつたことは既述の通りであるが、遺憾乍らこれらも八六〇年頃デーンの侵入をうけて荒廃してしまつた。然るにその潰滅以前、この両院で七才の時から Benedict Biscop の許で、次いで Ceolfrid に就いて修学したのが一世の碩学 Bede (Beda Venerabilis, 673—735) といふ、七三一年に筆を終えたその主著イギリス教会史は古代及び中世初期のイギリスを知る唯一にして最高の資料として光彩を放っている。ベダが如何に著明な人物であつたかは、前出のボンファシウスがドイツに滞在中ウィーマスの修道院長 Hwaetbeht に書簡を送りベダの作品を送付され度き旨を請求し (七四六—七四七間)⁽³³⁾、更にボンファシウスの後継者 Jul (マイニッ大司教) もヨークの大司教 Coena (Eihelbert) にベダの編纂による聖書を贈られたき書簡を發している (七六七—七七八)⁽³⁴⁾ ことによつても想像されるのであるが、このベダと親交があつたのがヨークの司教 Egbert であり、エグバートがヨークに設立した Cathedral school 出身の俊才が Alcuin であつた。アルクインはベダの歿年七三五年に生れているから両者に直接の關係はない。けれどもヨークの学校がアルクインの如き優れた人物を生んだ所以のものは、ベネディクト・ビスコップ以来ノーサンブリアに起つた偉大な文化活動の結果であつたと推定することは無理ではなからうと思う。アルクインは周知の如くチャールス大帝に招聘され、フランク宮廷にあつてカロリング朝ルネッサンスに貢献した主要人物であるが、彼がトゥールの St. Martin 修道院において教育事業に活躍中、己れの郷里ノーサンブリアのヨークから書物を取り寄せるために弟子を派遣することの許可をチャールス大帝に求めている事実⁽³⁵⁾、この推定に一つの裏書きをすと思われる。かく考え来れば六世紀に芽生えたイギリスにおけるベネディクト修道士の文化的業績は九世紀には本土から姿を消すが、それはアルクインを通じてフランクに移動し、中世初期の大陸文化発展の原動力となつてゐる。かゝる経過を

眺めるとき、七世紀におけるイギリスの宗教事情、特にベネディクト修道士たちの活動は、中世文化史に重要な意味を持つていると考えられるのである。

- (註 1) バトリックの生涯については伝説が多く、史家が屢々問題にするところであるが、N. K. Chadwick が "Intellectual Contacts between Britain and Gaul in the Fifth Century." (Studies in Early British History, 1954, Cambridge U. P., pp. 214—218 に「バトリックのローマ行は勿論のこと、ガリア諸修道院での修行に関して」これを事実とすべし確証はないと述べているのは興味ある意見である。
- (註 2) Collingwood, Roman Britain and the English Settlements, 1949, Oxford, p. 270 f., N. K. Chadwick, Ibid. pp. 200—201.
- (註 3) Beda Venerabilis, *Historia Ecclesiastica gentis Anglorum*, (以下 H. E. と略す。Migne, Patrologia Latina, 95) I, 17, 20.
- (註 4) ヘダによれば、ベンゴールの修道院は七団体に班れ、夫々に三〇〇名の修道士がいたと云う。故に総数二〇〇〇名程在院したと想像される。けれどもノーサンブリア王エセルフリードがブリトン人攻撃の目的でチェスターに進軍の際、彼等修道士中二百名は敵のために祈禱したという理由で殺され(六〇四)、これより同修道院は急に衰えた。(Beda, H. E., II, 2.)
- (註 5) ブリトン人の住するウェールズでは、中世前期(十二世紀まで)の教会の名称は、聖者の名を以てせず、地名を用うる筈であるから、当時は St. Asaph 修道院と称せず、Llanelyw の教会(Lanelwensis ecclesia)と呼ばれた筈であると推定される。(O. Chadwick, The Evidence of Dedications in the Early History of the Welsh Church. — Studies in Early British History, pp. 176—177.)
- (註 6) Beda, H. E., I, 25—26.
- (註 7) Beda, H. E., I, 27. 但しこの第一巻第二十七章は一部の学者によつてその真実性が疑われているが、未だそれが確定されたわけでもないから引用する。(Knowles, The Monastic Order in England, 1950, Cambridge U. P., p. 619, note 3. 参照)
- (註 8) Beda, H. E., II, 1. 及び Whitby の「修道士著」聖ペンコーン伝「第九」(Douglas, English Historical Docu-

ments, 241. E. H. D. 4巻。vol. 1, 1955, London, p. 687.)

(註 6) Beda, H. E., I, 29. Anglo-Saxon Chronicle 241年は英の年は601年である。(E. H. D., vol. 1, p. 147.)

(註 10) Beda, H. E., II, 15,

(註 11) Beda, H. E., III, 19.

(註 12) 10の年数は Anglo-Saxon Chronicle 241年 (前出 E. H. D., vol. 1, p. 151.)

(註 13) Beda, H., E., II, 5.

(註 14) Beda, H. E., III, 22.

(註 15) Stenton, Anglo-Saxon England, 1950, Oxford U. P. pp. 127—128. 参照)

(註 17) 例へば剃髪 (Tonsure) においてローマ式は頭部の中央を剃り周囲を残す (所謂 Corona) 'ケルト式は頭部の前半 (両

耳を結ぶ線の前方) を剃り落し、後頭部は残す' と云つた具合である。このケルト式は古代の僧侶 Druids の風習に原因すると思われるが、彼等のみの特色であるように思われる。

(註 18) 1666年三月末から九月末の間。(Stenton, Ibid. p. 129.)

(註 19) Agilbert は上記の如く Wini が来つた Winchester の司教となつた時、王の許を去つた人である。Anglo-Saxon

Chronicle (E. H. D., p. 153.) によればこの年は660年とある。後667乃至668年にパリの司教となつた。(Beda, H. E., III, 7, Stenton, Ibid. p. 122.) その間の行動は不明であるが、当会議の時偶々ノーサンブリアに來たものと考えられる。

(註 20) Beda, H. E., III, 25, 26. Eddius, Life of St. Wilfrid, (E. H. D., v. 1, pp. 692—693.)

(註 21) The anonymous Life of Ceolfriht, Abbot of Jarrow. (E. H. D., v. i. p. 698.)

(註 22) ウェルンフリヤが取つたオニキヤクトの戒律を強制的に実行せしめたかは問題であるけれども、彼がこれを採用したとすべく決定されてゐる。Knowles, Ibid. p. 22. Butler, Benedictine Monachism, 1924, London, p. 355. Heimbucher,

Die Orden und Kongregationen der Katholischen Kirche, B. I, S. 226. Schnürer, Kirche und Kultur im Mittelalter, 1927, Paderborn, B. I, S. 268. など。

(註 23) Beda, Vita Prosaica Sancti Cuthberti Episcopi Lindisfarnensis, XVII. (Migne, Patrologia Latina, 94.)

(註 24) Beda, H. E., IV, 5. Clovesho の司教は明確である。

(註 25) Beda Vita, Sanctorum Abbatum monasterii in Wiranutha et Girvum. (Migne, Patrologia Latina, 94.) 1.

- (註 26) 前掲 Hertford の宗教會議の決議第四章を以て、修道士は修道院長の許可なくしてその修道院より転住すべからざることを規定されてある。(Beda, H. E., IV, 5.) 所謂ヘネライクの戒律第五十八章に見える修道生活の重要な規定 *Stabilitas loci* に明記されたわけである。修道士の対信者關係が修道士自身の俗化墮落の原因とならざるよう留意されてある。
- (註 27) Stenton, *Ibid.* p. 147 f.
- (註 28) Knowles, *Ibid.* p. 22, Heimbucher, *Ibid.* B. I, S. 174.
- (註 29) Beda, *Vita Sanctorum Abbatum*, I.
- (註 30) Knowles, *Medieval Religious Houses, England and Wales*, 1953, London, p. 68 とは六八一年と見る。
- (註 31) Beda, *Vita Sanctorum Abbatum*, II.
- (註 32) Thompson, *The Medieval Library*, 1939, Chicago, pp. 111—112.
- (註 33) Letter of Bonifacius to Hwaetehart, Abbot of Wearmouth. (E. H. D., v. 1, p. 759.)
- (註 34) Letter of Iul to Coena (Ethelbert), Archbishop of York asking for prayers and the works of Bede. (E. H. D., v. 1, p. 768.)
- (註 35) Extract from a letter of Alcuin to Charles the Great. (E. H. D., v. 1, p. 786.)